

三内丸山や吉野ヶ里と共に、日本三大遺跡の一つとされる妻木晩田遺跡は、同時代としては国内最大の指定域を有する遺跡で、その広さについては講座でも度々強調されてきました。弥生時代中期以降に展開されたこの遺跡は、丘陵を下った淀江平野に点在する集落遺跡と連携する拠点集落と捉えることもできるようです。

下の図は、魏志倭人伝に登場する一支國に比定される壱岐島と、出雲平野を同じ縮尺で並べたものです。もし、邪馬台国大和説に立てば、出雲は魏志倭人伝に登場する投馬國に比定することも可能で、昨年の講座では弥生時代後期には、72の集落遺跡と16の遺跡群を確認することができるとのことで、勢力的にも國と呼んで遜色なさそうです。ふたつの間に、妻木晩田を含む淀江平野を同じ縮尺で置いてみました。淀江平野全体が連携していたとしても、壱岐や出雲と比較すると一桁近い規模の差があり、妻木晩田が出雲の支配下にあったのではないかと推測もできそうです。



弥生時代の始まりから出雲と妻木晩田には、情報や物の交流は頻繁だったでしょうが、支配とは“一方が他方を意のままに従わせる”というささか強制的なニュアンスが伴い、果たしてそのような力学が成立したのでしょうか。出雲と妻木晩田には直線にして60km以上の隔たりがあり、仮に妻木晩田側に協調的でない振る舞いがあったとしても、出雲がそれを威嚇できるほど身近な隔たりとは言えません。現代においても、あの超大国でさえやり方が拙ければ、隣接国の支配に失敗しそうなのですから。

“魏志倭人伝”は、正式には『三國志』の「魏書」の東夷伝の倭人条であり、全65巻中の第30巻に記載される二千文字足らずの文章です。著者は中国大陸を三分する「魏」「蜀」「呉」の領土や政治体制をそれぞれ“國”(国の旧字体)と認識し、この字で書名を表現しています。その一方、倭人条の中では、一支國、末廬國、伊都國なども同じ字を用いています。倭人条と同じ第30巻に記載される“韓伝”や“高句麗伝”などにも、夥しい数の國名が列挙されていますが、魏・蜀・呉と同じ定義とは思えません。

講座では、‘有力者がいる遺跡だけでなく、複数のムラを治め、その地域を一つにまとめるような、それまでよりもっと大きな力を持った有力者となり、その一つにまとめた、地域単位を古代の中国人がクニと呼んだのだろう’とのことでした。レジュメでは両者を区別するためにわざとカタカナで【クニ】と書かれています。

少し時代は下りますが、中国南北朝時代の南朝梁の時(502-557年)に、倭國から梁に遣わされた倭國使の服装が描かれた史料があります。受け入れた中国側の服装と比べると、裸足で半裸に近い格好からは明確な文化的格差が見て取れ、卑弥呼の時代も同等かそれ以上だと思われます。倭人伝に書かれた國名は、帯方郡使らの調査報告に基づいているはずですが、帯方郡使も地元の倭人から聴いた情報でしかありません。聴かれた倭人が“國”の概念を正しく理解していたのか、甚だ疑問です。

中国の城郭都市はいろんな時代の遺跡が紹介され、映画やドラマ、アニメなどでもお馴染みです。城壁は防御を目的としていますが、平時には城壁の外にある耕地で農民が作業しています。城壁の近くは富裕層の農地ですが、そこで作業しているのはその使用人です。城壁から離れた農地で作業するのは、貧困層の農民(自作農)たちです。富裕層の使用人は家や土地などの財産を持たない階層(=奴隸・奴婢)なのに対して、自作農は自分で耕作する農地を持てる階層ですから身分的には上位です。しかし、富裕層の財産の一部である使用人たちは城壁内に起居するのに対して、自作農たちは城壁の外にスラム街を形成してそこで暮らしていたようです。近年、湖南省の古井戸から発見された10万点を超える資料の分析では、これらの自作農の農地からは、農民が一年間に消費するだけの収穫しか得られなかったことが明らかにされています。衣食住に精一杯で、葬祭に費やす糧がないほどの貧困状態で、狩猟・採集の時代とあまり差がなかったようです。

弥生時代が始まる頃から渡来した人々は、どんな階層が多かったのでしょうか。卑弥呼の時代には、下戸はお尻を草むらに落とすほど後ずさりして、大人に道を譲らなければなりません。また貢物として外国に連れていかれるような、一欠片の人権も顧みられない生口もいます。階層化の波も、倭人社会に渡来していたのでしょうか。



梁職貢図の倭国使 古代中国の礼服